

まんなか配置した写真は、今秋九月二七日に撮影した写真です。寺の近くにある、普通の家の玄関先にかかげられた半旗。安倍元首相の国葬の日でした。

このお宅は普段から祝日には必ず、日の丸を掲揚しています。でも、国葬についてさまざまな声が報道されるなかで、その行事がどうであろうと、自分で立てると決めたことは貫くという、思いきりがよくて、さすがしい意志、つまり潔(いさぎよ)さに、深く感じて、寺までカメラをとりにもどって撮った写真です。無断で撮影して、文章まで書くことをお赦してください。

でも、この写真を載せて、こうした文章を書くことにためらいがありました。拙い文章だから、言いたいことがきちんと伝わるであろうか、と。こんな時は多くの字数を費やすよりも、詩歌のことばの力に頼ったほうがよいかもしれない。自分でつくる素養はないから、いつものとおり拝借しましょうか。たとえば、次のような俳句はどうでしょう。作者は高浜虚子です。

去年今年(こぞことし) 貫く棒の如きもの

この俳句は年末年始になると、どこかで見かける有名な句です。まさしく、何があつて



も、どうであっても、その日には国旗をたてる、というのは、貫く棒のような強い意志です。

でも、少ししっくりこないな!と数日考えていたら、思いだしました、江戸時代は仙厓禅師(せんがい=一七五〇〜一八三七)の有名な句です。

気に入らぬ風もあろうに柳かな

禅師は美濃国に生まれ、十一歳で出家得度。諸国を行脚修行し四十歳で九州博多の聖福寺(しょうふくじ)住職に迎えられます。聖福寺のキャッチフレーズは「扶桑最初禅窟(ぶそうさいしよぜんくつ)」。日本で最初の禅寺を名のる名刹を復興し、軽妙洒脱な墨跡と逸話で博多の町衆に慕われたという。

たくさんある名句のなかでも、よく知られたのが「柳」の句。良い風ばかりではない。イヤな風もある。嫌な風だからといって逃げたり逆らったりするのではなくて、いつもと同じように、さらりと受け流してやり過ぐす。まさに、あの日の半旗ではないですか。

強靱な意志だけでは、さらりと受け流せない。柳のようにしなやかでなくては。強く、やわらかく。そんなふうに過ごせたら、と思うのです。